高校調査書

共通第1次学力試験制度による大学入試も昭和59年度で第6回を迎え、この制度下の入学生も2回にわたり社会に送り出した。この間各大学では、単に入学試験データのみならず、大学入学後の成績等のデータの蓄積も着々と進み、従って高校調査書関連の調査研究内容にも変化・進歩が認められるようになって来たのが大きい特長である。

調査書成績の分布と標準偏差

殆どの大学で調査している項目であるが、多年次にわたるデータから受験生の評定平均値の標準偏差があまり変動していないことを指摘している大学がある。だだ、評定平均値の度数分布の形に不自然な片寄りが見られる年が時々あると指摘している。

奈良教育大学では、合格者と不合格者に分けて教科毎に評定平均値を比較していて、「国語」から「家庭」までの8教科には両者間で有意差が認められるが、「その他」の教科では有意差は認められないとしている。さらに同大学では性格行動の記録についても両者間の差異に関する調査を行っている。

調査書成績と合格率

この調査も以前から行われていたものであるが、調査書の成績概評を変数とする方法と評定平均値を変数として行う合格率調査がある。いずれの場合でも調査書成績の良い者の合格率が高いことが示されている。評定平均値を変数とした場合、平均点に対する合格率の回帰直線を求めた例があるが、最高点に近い場合でも合格率は必ずしも100%にはならないことが示されている。東京医科歯科大学はじめ、いくつかの大学では毎年この調査を続けている。

調査書成績の合否に及ぼす影響を分析している例もいくつかあり、単純なものでは入学試験成績との相関係数調査結果から言及している。また判別分析を行った結果から、調査書は文系グループでは影響するが、理系、その他のグループには余り影響がないことを指摘する例もある。あるいは、入試選抜で調査書を無視したときの合否の入れ替わりを実際のデータによりシミュレーションした報告があり、他の試験成績重視よりもその割合が少ないことを示している。しかし、これは選抜成績に於ける配点比率や、選抜成績総合点に対する相関係数に依存するものと考えられる。

調査書成績と入学試験成績との相関

多数の大学で調査を行っていて、いずれも入試総合成績との関連のほか、共通第1次学力試験成績、第2次試験成績等に分けて相関調査をしているが、滋賀医科大学では小論文成績・面接成績との相関調査も行っていて、学力検査成

績との相関よりも調査書成績との相関が比較的大きい値であることを示している。

学力検査成績との相関は、殆どの場合有意な相関であるが、共通第1次学力試験と第2次試験成績間の相関係数などに較べて、かなり小さい値となる場合が多い、しかし比較的大きい値を示している例もあり、学部・学科の違いや、地域性とくに1高校から受験者が集中しているかどうかによって、相関係数の値が大きく変動するようである。また、共通第1次学力試験との相関の方が第2次試験成績との相関より高くなっていたため、第2次試験科目の見直しをしたにも拘らず、過去6年間の傾向と変わらないことを指摘する報告があるほか、別の大学では、このことは高校での共通第1次学力試験対策重視の傾向を示している証拠ではないかと推測している。

秋田大学等では、現役と浪人別で相関調査を実施していて、2浪以上、現役、1浪の順になることを示している。ただ現浪別としてみた場合は現役がより高い相関を示している（一橋大学等）例もある。

また、秋田・新潟・福井大学などでは、受験生の多い高校単位でこの値の調査を行い、同時に高校毎に調査書の1評価平均値あたりの共通第1学力試験得点を求めている。その結果は高等学校により差異があり、高校間での調査書成績の評価基準の差によると推察している。

調査書成績と入学後の成績

10大学以上から、この調査結果が報告されていて、全般的に入試成績との相関よりも高い値が得られている。

とくに東京医科歯科大学では、共通第1次学力試験、第2次試験、入試総合成績および調査書評定平均値と入学後の進学課程自然科目、進学課程外国語科目、進学課程総合、専門課程基礎科目、専門課程臨床、専門課程総合、および大学総合成績と細かく分類して相関係数調査を行い、調査書成績との相関は入試成績との相関と同程度あるいはそれ以上の値となっていることを示し、選抜への積極的な利用への根拠となり得ることを示唆している。

室蘭工業大学でも同様な調査を行っているが、調査書評定平均値、共通第1次学力試験、第2次試験成績と入学後の一般教育、専門教育科目、総合成績との間の相関係数を現浪別、大学全体で求め、現役および大学全体では調査書成績との相関が最も高く、浪人では入試成績との相関が高くなることを報告している。また、同大学では各教科別に上記の分類で相関を求めているが、外国語については調査書成績や共通第1次学力試験成績と高い相関を示し過去のデータとも符合すること、しかし、数学については、調査書成績との相関は高いものの共通第1次学力試験成績との相関は無相関に近いこと、理科については、むしろ共通第1次学力試験成績の方がやや高い相関を持つと述べている。

滋賀医科大学では、調査書成績の上位の者と下位の者とに分けて、入学後の成績（専門課程）との関係を求めているが、上位グループの成績に有意差が認められること、留年者が下位グループに多く、また学生の平均年齢も下位グループで高いことを示している。

その他の大学においても、ほぼ同様な結果が

得られていて、今後ともこの種の追跡調査への意欲が感じられる。

調査書成績の高校間格差と入学後の成績

推薦入学制度などでは高校調査書が判定資料になる場合が多いし、入学後の成績との相関も高いことから有力な選抜資料になり得ると考えている報告が多い。しかし、ここで問題になるのが調査書の成績評価の基準に差があることで、異なる高校の調査書と比較する際に不公平が生じることである。今までに行われて来た調査の中にも調査書の信ぴょう性に関するものも少なくないし、次に述べる例と同じ目的での調査もあった。宮澤弘成（東京大学）の個人研究によれば、受験者が多数の高校について、各高校の共通第１次学力試験成績の水準を用いて調査書成績を補正した後、入学後の成績との相関を求めると補正以前の相関係数よりも、かなり高くなること、このようにして求めた調査書成績は、学内成績の予測手段として第２次試験に匹敵する能力を持つことを示している。また、１高校当たりの人数が多い程、補正後の調査書成績との相関が高くなることから、このような補正を各大学で行うよりは、全国的規模で行うと有効であると述べている。